

賢人と馬鹿と奴隷

奴隷はとかく人に向って不平をこぼしたがるものがあります。何かにつけてそうですし、またそうしかできないのです。ある日、彼はひとりの賢人に行きあいました。

「先生」と、彼は悲しそうに言いました。涙が糸のようにつながって、眼のふちから流れ落ちました。「あなたはお存じでしょう。私の暮らしは、まるで人間の生活ではありません。食べるものといったら、一日に一回あるかなし、その一回がまた、高粱のカスばかり、犬や豚だって食べたがりません。おまけに、小さな碗にたった一杯……」

「まったくお気の毒だね」賢人も、痛ましげに言いました。

「そうですとも」彼は、愉快になつてきました。「そのくせ、仕事は昼も夜も休みなしなんです。朝は水汲み、晩は飯たき、昼は使い走り、夜は粉ひき、晴れば洗濯、雨降りや傘さし、冬は火燃しで、夏は扇ぎ、夜中のご馳走つくり、御主人は麻雀、おこぼれどころか、貰うものは鞭だけ……」

「まあまあ……」賢人は、ためいきをつきました。眼のふちが少し赤くなって、いまにも涙がこぼれそうです。

「先生、これではとてもつづきそうにもありません。ほかに何かやり方を考えないことには。でも、どんなやり方がありますしょう……」

「いまにね、きつとよくなるよ……」

「そうでしょうか。そう願いたいものです。でも、私は、先生に悩みを打ち明けて、同情して頂いたり、慰めて頂いたりしましたので、すっかり気が楽になりま

した。まったく、お天道様は見殺しにはなさらないものですね……」

けれども二、三日たつと、彼にはまた不平が起つてきました。そこで例のように、不平を訴える相手を探しに出かけてゆきました。

「先生」と、彼は涙を流して言いました。「あなたはご存じでしょう。私の住んでいるところは、豚小屋よりもっとひどいのです。主人は私を、人間あつかいしてくれません。私より狎ころの方を、何万倍もかわいがっています……」

「唐変木！」と、その人は、いきなり大声でどなったので、彼はびっくりしました。その人は馬鹿でありました。

「先生、私の住んでいるところは、ちっぽけなぼろ小屋です。じめじめして、まっくらで、南京虫だらけで、睡ったかと思うとたかってくる、やたらに食いまわります。むつと鼻をつくように臭いのです。四方に窓一つあいていません……」

「おまえの主人に言つて、窓を開けてもらうことができないのか」

「めつそうもない……」

「それじゃ、おれを連れて行って見せろ」

馬鹿は、奴隷のあとについて、彼の家へ行きました。そしてさっそく、家の外から泥の壁をこわしにかかりました。

「先生、何をなさるのです」彼はびっくり仰天して、言いました。

「おまえに窓を開けてやるのさ」

「いけません。主人に叱られます」

「構うものか」相変らずこわしつづけます。

「誰か来てくれ。強盗がわしらの家をこわしているぞ。早く来てくれ。早く来ないとぶっこ抜いてしまうぞ……」泣きわめきながら、彼は地面をのたうちまわりま

した。奴隷たちがみんな来ました。そして馬鹿を追い払いました。

叫び声をききつけて、ゆっくり最後に出てきたのが、主人でありました。

「強盗が、わたくしどもの家を毀そうといたしました。わたくしが、一番はじめにどなりました。みんなで力を合せて、追っ払いました」彼は、うやうやしく、勝ち誇って言いました。

「よくやった」主人は、そう言つてほめてくれました。その日、大勢の人が、見舞いにやつて来ました。賢人もそのなかにまじっていました。

「先生、今回は私に手柄があつて、主人がほめてくれました。このまえ、先生が、きつといまによくならんと言つてくださったのは、ほんとうに、先見の明で……」希望に満ちたように、彼は朗らかにそう言いました。「なるほどね……」賢人も、お蔭で愉快だと言わんばかりに、そう答えました。

(一九二五年十二月二十六日)

魯迅選集 第1巻 (全13巻)

1956年6月7日 第1版第1刷発行
1964年2月26日 改訂版第1刷発行 ©
1980年1月10日 第10刷発行

訳者 竹内好
発行者 緑川亨
〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店